

世界で認知されるブランドに

富士ダイス 西嶋守男社長に聞く

耐摩耗工具メーカーとして国内トップシェアを誇る富士ダイス。超硬合金製のダイスやロール、製缶用金型、ガラスレンズ成形用金型など耐摩耗工具に特化した事業を展開し、来年には創業70年を迎える。「世界で認知されるブランドを目指したい」と話す西嶋守男社長に現在注力している取り組みや今後の成長戦略などを聞いた。

来年で創業70年を迎えます。

当社はダイス・プラグの製造から始まり、自動車部品や製缶、ガラスレンズ向け金型などに製品を広げ、超硬素材から加工までを一貫した受注生産体制で事業を展開してきた。その結果、現在では耐摩耗工具の市場シェアの約3割を獲得するまでに成長できた。

今後の成長戦略を教えてください。

今年策定した中期経営計画では「受注増への対応と将来の社会変化への準備」を基本コンセプト

7.9億円（前期比8%増）で過去最高となり、

今後も超硬製品の需要は増加するとみている。こうした需要増に対応するためには、供給能力の強

生産効率向上し、需要増に対応

に掲げた。中でも特に注力している一つが、

生産効率の向上だ。2018年3月期の売上は1

化が欠かせない。

具体的に取り組んでいることは、

備とは。次世代自動車の拡大による自動車産業の変革など今後あらゆる産業でニーズの変化が予測される。

当社のブランドである「フジロイ」を海外でも認知されるようになってほしい。競争力を高める取り組みを進める一方で、アジア、北米を中心に海外展開も加速させ、少しずつブランドを根付かせていきたい。



西嶋守男（にしじま・もりお）社長 山口県出身。1975年慶応大学工学部卒業後、造船会社入社。78年富士ダイス入社、2006年フジロイ（タイランド）社長、09年富士ダイス取締役、15年社長に就任

まず生産拠点の再編

「素材開発力」、そして0.1mmオーダーといった高い加工精度が要求される金型加工で培った「加工技術力」を持つ。

だ。昨年には門司工場を熊本製造所に集約し、生産効率を高めた。また、自動化にも取り組んでいる。郡山製造所ではロボットを導入し、測定の自動化を図っている。熊本製造所では加工機とロボットの組み合わせた加工工程の自動化に取り組んでおり、年内には本格稼働を予定している。

これらの強みを活かして、変化するニーズに柔軟に対応するとともに、新技術の開発と新分野の開拓を目指す。どんな新技術、新分野に取り組みますか。

現在は医療・化粧品向け金型や次世代自動車部品向けの金型、赤外線レンズ金型の開発に着手している。また、超硬合金は耐摩耗性が高く、長寿命や精度の安定化が図れる。ユーザーの課題を解決するために、既存分野でも超硬合金への切り替えを提案していく。

超硬合金は耐摩耗性が高く、長寿命や精度の安定化が図れる。ユーザーの課題を解決するために、既存分野でも超硬合金への切り替えを提案していく。